

平成22年度文部科学省委託事業

「青少年体験活動総合プラン子ども・若者育成支援のための体験活動推進事業」

企画事業 発達段階に応じた体験活動 ～幼小いっしょに「のとまり会」～

- ◆期 日 第1回<いこう> 平成22年 8月29日(日)【日帰り】
第2回<とまろう> 平成22年 9月11日(土)～12日(日)【1泊2日】
第3回<もう1回> 平成22年12月18日(土)～19日(日)【1泊2日】
- ◆会 場 国立能登青少年交流の家
- ◆対 象 年長(5歳～6歳)児と小学1年生 各20名程度。
- ◆参加者 第1回 31名(子ども20名、保護者11名)
第2回 27名(子ども19名、保護者 8名)
第3回 43名(子ども22名、保護者21名)
- ◆講 師 第1回 沼田 直子(石川県こころの健康センター次長)
第2回 平野 吉直(信州大学教育学部長)
国立能登青少年交流の家職員
- ◆主 催 独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立能登青少年交流の家
- ◆後 援 新潟・富山・石川・福井・滋賀各県教育委員会
- ◆協 力 金城大学短期大学部 朝倉 善裕・金城大学短期大学部ボランティアスタッフ

1 趣 旨

年長児と小学生が共に生活・活動を行うことで、学び合う機会を設ける。年長児にとっては、小学生とふれあうことで小学校への段差を低くし、小学生にとっては、お兄さん、お姉さんという自覚を持たせることで、成長への一歩を踏み出す。また、保護者がつどう場を設けることで、保護者同士の情報交換により、幼児から小学生へのステップアップを円滑なものにする。

2 ねらい


- 生活・活動場面においてメリハリをつけることで、低年齢期の子どもたちに体験活動の楽しさを感じさせる。
- 自分の食べるものを作る、外で寝る、布団を敷いて寝る、長く歩く、等を活動として取り入れ、楽しみながら基礎的な生活形態を体験する。
- 保護者同士のネットワークづくりの場を設ける。

3 日程


第1回 < 8月29日 (日) >

		子どもプログラム	保護者プログラム
29日	午前	はじまりの会 (自己紹介・アイスブレイク) 探検能登の森 ○探検しながら、施設を知る ○仲間と交流する ○ゲームや課題に挑戦し協力する ○自然にふれる	トークセッション 「子育て支援と幼少期の心の発達」 石川県こころの健康センター次長 沼田直子 氏 保護者交流タイム
	午後	おやつ作り (フルーツポンチ) おやつタイム ふりかえり 子ども:一人ずつ感想を発表 保護者:子どもの様子を見学	

第2回 < 9月11日 (土) ~ 12日 (日) >

11日	午後	はじまりの会 (自己紹介・アイスブレイク) レクリエーション 野外炊飯 (ハンバーグサンド) 寝床の準備 紙芝居・読み聞かせ 就寝 <small>※テント泊を予定していたが荒天のため宿舎に宿泊</small>	
	午後	ミニ運動会 ○仲間と「協力する」 ○体を動かす ○「挑戦」する <small>※海までの遠足を予定していたが荒天のため変更</small> ふりかえり 子ども:グループで1枚の模造紙に絵を描いてふりかえり→発表 保護者:子どもの様子を見学	
12日	午前		ワークショップ 「幼児期における自然体験活動の大切さ」 信州大学教育学部長 平野吉直 氏 保護者交流タイム
	午後		

第3回 < 12月18日 (土) ~ 19日 (日) >

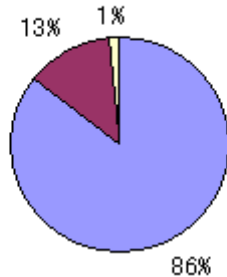
18日	午後	はじまりの会 (自己紹介・アイスブレイク) 森の工作屋さん ○自然を感じる ○自然の素材にふれる ○創造力を発揮する 寝床の準備 紙芝居・読み聞かせ 就寝	
	午前	アウトドアクッキング (ほかほか焼芋・やきやきマシュマロ) 親子レクリエーション	
19日	午後	あったかパーティー みんなでランチを食べながら、思い出発表会&スライドショー ふりかえり 子ども:楽しかったことや思い出を絵に描いてふりかえり→発表 保護者:子どもへの手紙(後日郵送)	

4 成果と課題

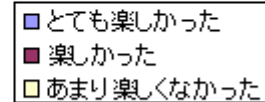
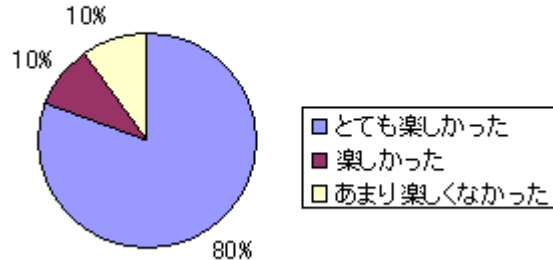
(1) 成果

<子どもプログラム…>

●能登の家ですごしてどうでしたか



●能登の家にお泊りをしてどうでしたか



子どものアンケートから「ハンバーグを作ったことが楽しかった」「みんなで寝たことが楽しかった」「友だちがいっぱいできた」「ちょっと怖かったけど、楽しかった」、といった記載があった。キーワードとして、『みんな』や『楽しかった』といった言葉がたくさん出ており、親元を離れての初めてののお泊り、不安や心細さを感じながらも、初めての友だちと一生懸命コミュニケーションを取りながら、仲間と協力して活動を楽しむことができたといえる。また、十分なスタッフを配置し、一人ひとりの小さな変容、小さな努力を見逃さず、肯定的な評価を「言葉」に表しつつ、小さな変容を大きく評価することで、子どもの達成感、満足感につながり、自尊感情を高める結果となった。

<子どもの活動の様子から…>

自然に親しむ

各回、能登の森の探検や自然の素材を使った工作、アウトドアクッキングなどの自然体験を取り入れ、自然に親しむことで子どもたちの自然に対する興味関心へとつながった。

「ごはん」をつくる・食べる

自分たちで「切る」「こねる」「まるめる」など、基本的な調理活動を取り入れながら、仲間と協力して作る楽しさ、食べる楽しさを感じることができた。

みんなで寝る

環境の変化や初めてののお泊りで、着かない子どもやなかなか寝付けない子どももいたが友達の声がけやボランティアスタッフが寄り添うことで、「みんなで寝る」ことができた。親元を離れて、一人でもお泊りができたことが、子どもたちの大きな自信となった。



ハンバーグづくり（「こねる」）



みんな仲良く、おやすみ中

<保護者プログラム…>

保護者の学びの場として、「子育て支援と幼少期の心の発達」、「幼児期における自然体験活動の大切さ」の2つの視点から、講師を招いてワークショップ等を実施したことで、保護者の新たな気づきへとつながった。また子どもと保護者のプログラムを分けることで、保護者もじっくり学ぶことができ、保護者同士の交流やネットワークの構築の場として、有意義な時間となった。

活動する子どもの様子を観察したり、子どもへ手紙を書く時間を設けたことで、保護者自身が、改めて自分とそして子どもと向きあう機会となった。保護者のアンケートから「できないと思っていたことができていて親として発見することが多かった」「子ども自身の可能性の広さを教えられた」「初めての泊りに心配したけれど、子どもを信じて待つという親にとっても良い時間となった」といった感想があげられ、親の満足度が高かったことが分かる。

<事後アンケートから…>

参加した子どもの変容について、事後アンケートを実施した。

○具体的な変容について（自由記述）

- ・ 親がいなくても友達の家泊りに行けるようになった。
- ・ 嫌いなものを頑張って食べるようになった。（多数）
- ・ お手伝いをするようになったり、チャレンジ心が向上した。
- ・ 自分から進んでお手伝いができるようになった。（多数）
- ・ 自分に自信が持てるようになった。
- ・ 自分の持ち物を片付けられるようになった。
- ・ 弟の面倒をみるようになった。

○その他

- ・ また行きたい、来年も参加したいと意気込んでいる。（多数）

(2) 課題

- ・ 低年齢期対象のプログラム開発や低年齢期の視点に立った施設・設備の充実を図る。
- ・ 年長児、小学生の参加割合にバランスが取れるような広報の工夫。
- ・ 幼児学科等を持つ大学や専門学校と連携し、十分なスタッフ体制での事業運営
- ・ 幼稚園教諭及び保育士を目指す青少年のための学びの機会の提供。（研修会等の実施）

